

久 潤 カ ノ オ プ ス

— 星 座 漫 筆 —

その朝倫敦ウエストミンスター大寺院の聖誕祭の鐘の音を——無論ラヂオで聞いて、その晩アルゴ座の一等星カノオプスを見たのは俤せだつた。十一時過ぎに東京郊外の駒澤へ歸つて、家までの暗い櫻並木の道を歩き乍ら星を仰いで行くと。よく晴れた晩で、南中したオリオン座が繡佛の千手觀音の様に燦爛と懸り、東には蟹座のブレイゼベ星團までが微茫と見えてゐた。南の地平の方にも雲が無いやうだし。シリウスの下の直角三角形 $\epsilon \delta \gamma$ の高さからも判断して、『事によるとカノオプスが見えるかも知れないぞ』と思つた。僕は關東大震の當時、夜警をやつてゐる間に、家からは十町ほど南の淋しい野面で、思ひがけずこの星を発見したのだが。その後も五回と見てゐない。この憧れ心地は關西の諸君には想像も及ばぬことかと思ふ。

それで家へ歸るなり、双眼鏡をポケットへ押し込み、青山師範のH君を連れ出して、眞暗な裏通りを犬に咎められながら、そこの野原まで辿りついた。足の下にはもう霜柱が軋んでゐた。けれど、心當ての南の地平は横濱のあかりが抹かしてゐるし、横須賀らしいサーチライトが寝たり起きたりしてゐるので、『また駄目か』と失望しながら一心に目を凝らしてゐると、やがて濃氣の中から、七、八度の高さの處に、光度も色も牡牛座のアルデバランに酷似した大星が現れて來た、そして息でも吐く様に明滅し始めた。正しくカノオプスだつた。支那でいふ南極老人だつた。僕には久潤、H君には初對面なので、ほんとに胸を躍らせながら、十分餘りも肉眼で、また双眼鏡で眺めてゐた。その中にすっかり見えなくなつてしまつた。

僕は提案したい。もし東京地方の會員諸君の中に、カノオプスの適當な觀望地を知つて居られる人があつたら、五藤支部長まで報告されては如何がだらう？ さうしたら、僕に許されることになつた此の頁で發表して、お互ひの便宜を圖りたいと思ひます。(五・一二・二六)